

これからの学術情報の提供ビジョンについて
— 医学中央雑誌刊行会の視点から —

2011年5月27日
NPO医学中央雑誌刊行会 松田 真美

学術情報 ~ 医学の場合

- 医学とその周辺分野の学術情報には、「研究」と「臨床」という2つの領域(側面)がある。
- 医学の学術情報を必要とする医療従事者 => 医師、看護師、薬剤師・・・と多彩。
- さらに、専門家(医療従事者)ではない、一般市民も専門の医学情報を求めるようになっている。
- エンドユーザーサーチが主流となったとはいえ、企業での利用を中心に、代行検索も重要。

=> それぞれに適した情報提供が求められる

本日の話題

「学術情報の流通」において、医中誌が現在どういった役割を果たしているのか? 検討すべきテーマは何か? 今後どうすべきか?
(一般化できる部分があることを祈って)

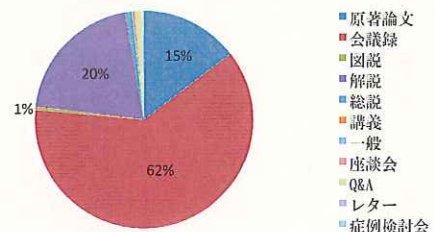
- 「医学分野の学術情報」=> 多様なニーズ
- 「日本語の学術情報」ということ
- 「インターネット」がすべてを変えた
- まとめ

医中誌の利用について (医療従事者)

- 医師の話より: 医中誌を検索するのは「あるテーマについて日本でどれくらいの論文が書かれているかを知りたいとき」「専門分野以外のことを概括的に知りたいとき」
- 後者については、論文情報に限らず、書籍の情報でも良い(むしろあったほうが良い)
=> 解説的記事の重視、より幅の広い情報の提供
- 看護師のニーズも高いが、「機関(病院)で契約していても利用できない」状況も。
=> (医中誌にはいかんともし難い面も大きい)ができる対応を検討。

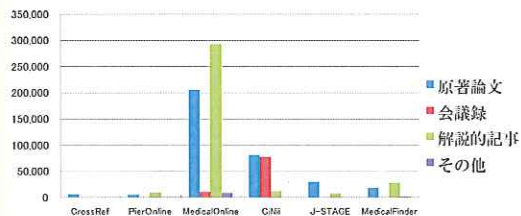
「医学分野の学術情報」=>
多様なニーズ

医中誌データの論文種類の内訳



2010年作成データ 346,626件の内訳

実際にどういった文献が見られているか



2008年1月～5月のフルテキストリンクのクリック数

公共図書館での利用

公共図書館における医中誌Webの利用の実態調査 (JMLA受託研究、平紀子らによる)より

- 計8機関ののべ57名の図書館員への聞き取り調査
- 利用者から受けた質問(計95)で多いのは「画面上で文献が見られないか(28)」「検索した文献の入手方法(27)」「検索の方法(23)」
- 公共図書館員向けの(医中誌Webの使い方を含む)講習会受講者は、自信を持って医中誌Webを利用。

医中誌の利用について(一般市民)

「How they “change”:health consumers in Japan」(酒井由紀子ら)より

- 1,200名の一般市民を対象としたアンケート調査。
- 全体の48.9%が「日本語であれば、医学論文を(医学情報を得るために)読みたい」と回答。

一般市民への情報提供(今後)

- 医中誌の情報(専門的な論文情報)には一定のニーズがあるのは確か、しかし、現状では、そのニーズと出会えていないと言いき難い
- 適切な形で情報を届けるために、公共図書館・医学図書館・患者図書室における、サービス提供サイドとの連携が必要。

公共図書館での利用実態

A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	平均
557	58	18	12	0	39	15	13	5	108	13	0	5	65

医中誌Webを契約している公共図書館の、
2011年4月一か月間のログイン回数

- A ⇒ 国立国会図書館本館
- B ⇒ 都立中央図書館
- J ⇒ 大阪市立中央図書館

一般市民への情報提供(今後)

- 最終的な文献の入手が問題 ⇒ 「オープンアクセス」がひとつの解決となりえるか?
- 「学術論文のOA化に対する市民の需要」(佐藤翔らによる一般市民800名を対象とした調査)より～OA論文を読んだことがあるのは93名(11.6%)
- 「フリーアクセスの論文への絞り込み」機能の活用。(デフォルトで設定可)

「日本語の学術情報」ということ

ImpactFactor

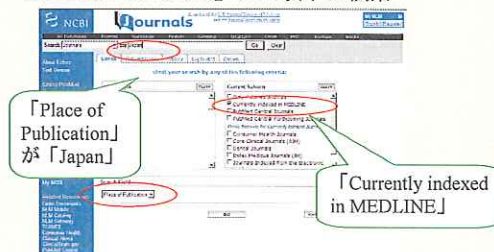
- 学会としては、「MEDLINEへの収録」⇒「IFの対象誌」⇒「IFを上げる」のが大きな目標。
- 第2回 日本医学雑誌編集者会議(JAMJE)における「Cancer Science」編集委員による事例報告
 - ・2005年より、Wiley-Blackwell社から発刊
 - ・オンラインシステムによる投稿とpeer review
 - ・Wiley InterScienceでのonline versionの公開と、PubMedとSCIへのリンク⇒ IFの急激な上昇・海外からの投稿数増加

英文誌と和文誌

- 「ほんとうの問題は、英語の世紀に入ったことにある。」(「日本語が亡びるとき」水村美苗)
- 「日本語の論文にもなんとかして国際的意味付けができないものか」(「Impact factor「日本御危篤」」中村昌弘、1997)
- 「我々医学研究者はオリジナルの研究成果は出来る限り英語で報告すべしと教育されている。そのため、英語で書かれた原著と和文で書かれた原著の間には大きなインパクトの差がある。」(「医中誌データベースに期待すること」門川俊明、2007)

MEDLINE収録の日本の雑誌 (抽出方法)

「Journal Database」にて以下の検索



⇒ 162件ヒット。うち、医中誌未収録は7誌のみ (2010年8月)

医中誌の採録範囲

そもそも、医中誌に収録される定期刊行物とは

- ・「発行元(出版社、学会など)が日本」が基本
- ・「日本語の雑誌」ということではない。日本の英文誌も収録。(全体の約1割が英語論文)
- ・編集以降を海外の出版社に委ねている日本の学会も増加。基本の考え方が揺らぎつつある。

MEDLINE収録の日本の雑誌の分析

- 162誌中、149誌(93%)が電子化
- 162誌中、IFを持つ雑誌は62誌
- 62誌のIFの平均値は1.42、中央値は1.28
- 62誌のプラットフォームの内訳は、海外が40%、国内が60%(ほとんどがJ-STAGE)

1993年当時との比較

- ▶ 1993年当時、MEDLINEとトムソン・ロイターDB双方に収録されていた日本の雑誌は35誌、IFの平均値は0.649、中央値は0.45であった。

(深川光郎、吉田幸子: MEDLINE収録誌を対象としたインパクトファクターの分析、医学図書館、1996、43(1)、P.87-93)

	MEDLINEとトムソン・ロイターDB双方に収録される国内医学雑誌	IF平均値	IF中央値
1993年	35誌	0.649	0.45
2009年	62誌	1.42	1.28

「インターネット」が
すべてを変えた

今後の方向性は・・・

- ▶ 「MEDLINEに収録されている雑誌は医中誌は採録しなくて良いのでは？」との意見もあるが・・・
- ▶ 医中誌では、英文誌は標題・抄録をすべて和訳している。
- ▶ つきつめて考えると、日本における英語の位置付けの話となっていく。難しい議論。
- ▶ ひとつの考え方として「英文学術情報への橋渡し」は現実的か。
⇒ Ver. 5より、参考文献リンクを開始。PubMed、また、CrossRef (DOI) 経由で欧文誌にリンク。

そもそも医中誌Webの存在自体・・・

- ▶ 医中誌Webのサービス開始は、2000年。
- ▶ 医中誌CDのサービス開始は、1991年。当時「自前のネットサービスの提供」など考えられなかったこと。

医中誌Web (Ver. 5) の参考文献リンク

- 1 201102120
各種疾患 原因・免疫性疾患 GBSとガングリオイド複合体抗体 最近の知見(解説)
Author: 徳島大学 医学部神経内科
Source: [Annals Review 2011](#) 11巻 Page293-299(2011.01)
● 抄録全文
● 参考文献リンク
- 1) Van Doorn P, Ruts L, Jacobs B. Clinical features, pathogenesis, and treatment of Guillain-Barré syndrome. *Lancet Neurol.* 2008; 7: 939-50
[PubMed](#) [CrossRef](#)
 - 2) Kusunoki S, Kaida K, Usuda M. Antibodies against gangliosides and ganglioside complexes in Guillain-Barré syndrome: New aspects of research. *Biochim Biophys Acta.* 2005; 1780: 441-4
[PubMed](#)
 - 3) Kaida K, Kusunoki S. Antibodies to gangliosides and ganglioside complexes in Guillain-Barré syndrome and Fisher syndrome: mini-review. *J Neuroimmunol.* 2010; 223: 5-12
[PubMed](#) [CrossRef](#)
 - 4) Chiba A, Kusunoki S, Ohata H, et al. Serum anti-GQ1b IgG antibody is associated with ophthalmoplegia in Miller Fisher syndrome and Guillain-Barré syndrome: Clinical and immunohistochemical studies. *Neurology.* 1993; 43: 1911-7
[PubMed](#)
 - 5) Hakomori S. The glycosynapse. *Proc Natl Acad Sci U S A.* 2002; 99: 225-32
[PubMed](#) [CrossRef](#)
 - 6) Simons K, Ikonen E. Functional rafts in cell membranes. *Nature.* 1997; 387: 569-72

人々の情報入手行動の変化

- ▶ 「活字離れ」ではなく「紙離れ」。ネットに長時間接している。
- ▶ 例えば・・・電車の中での人々の行動はこんな感じ？
 - ・新聞は昔に比べ圧倒的に減った。たぶん1割
 - ・本を持ってる人が1割
 - ・携帯を使って何かやってる人が5割
 - ・あとは、音楽、何もしない、寝てる

医学部学生・研修医・卒後の情報入手

門川俊明先生(慶応義塾大学)の講演(2011年4月)より

医学部学生

- ▶ 国家試験対策の教科書がだんだん緻密になってきて、学生としては記述が分かりやすい。授業の教科書のように使い始めている。
- ▶ 普通の教科書をあまり買わない。
- ▶ 2009年4月の生協の売上ランキング・・・1/3は国家試験本である。

医中誌収録誌の電子化状況

	全誌(5,768誌)対象	カレント誌(3,044誌)対象	文献数
Cross Ref	305	250	117,658
NII-ELS	693	409	635,923
Medical Online	762	634	574,478
Pier Online	30	30	29,405
J-STAGE	318	279	90,833
MedicalFinder	36	32	47,136
Journal@rehive	327	210	30,631
Annual Review	9	7	1,135
Medical e-hon	145	137	42,323
日産婦関東	1	1	3,764
合計(重複除く)	1,711	1,216	1,360,940
割合	30%	40%	18%

医学部学生・研修医・卒後の情報入手

研修医

- ▶ 各臨床の現場の現場で使えるようなマニュアル本を良く買う。
- ▶ 疾患に関する最新の知識が必要な場合はUpToDateが圧倒的人気。
- ▶ 診療ガイドラインも参考にする。
- ▶ プラスアルファの知識については、講義が豊富に用意されていて、そのハンドアウトも入手できる。

フリーでアクセスできる雑誌

- ▶ J-STAGE と CiNii-ELS でフリーでアクセスできるもの

	JSTAGE	CiNii-ELS	合計	割合
全誌	257 (318中)	407 (693中)	664	38.8%
カレント誌	227 (279中)	262 (409中)	489	40.2%

- ▶ 上記の他に、学会HPで独自に公開されているものも相当数ある。
 - ⇒ オープンアクセスは相当進んでいる。
 - ⇒ 医中誌Webからのリンクをより網羅的に。
 - ⇒ 「フリーアクセス文献」への絞り込み機能

医学部学生・研修医・卒後の情報入手

3年目以降の医師

- ▶ 信頼性の高い情報として英語の雑誌
 - ▶ 全体を俯瞰したいとき、日本語の総説
 - ▶ 学会や講演会で情報を入手
- ⇒ 診療ガイドラインや、学会・講演会のハンドアウトなど、従来の出版物以外の様々な情報源がある。

電子版のみで発行されている収録誌

- ▶ ネット上での公開のみの収録誌
 - 82誌
 - うち、J-STAGE が 28誌
- ▶ CD-ROMでの提供のみの収録誌
 - 25誌
 - 抄録集、紀要、講演要旨集など

医中誌WebからOPACやリゾルバへのリンク

- ▶ 大学に関しては、全体の8割がリンクを設定。
- ▶ 大学のリンク設定は、OpenURLが6割となった。

	Open URL	FREE FORMAT	NONE	
大学	190	122	10	322
病院	61	74	142	277
製薬会社	13	8	5	26
研究機関	3	1		4
その他	4	9	14	27
合計	271	214	171	656

一般市民への情報提供

- ▶ 医学の学術情報に対する相当のニーズがあることは、アンケート調査からも裏付けられている。
- ▶ しかし実際には、単に公共図書館でデータベースを導入するだけでは事足りない。
- ▶ 文献の入手が問題。
- ▶ 医学の専門図書館・公共図書館・コンテンツ提供者らによる連携が必要。

まとめ

和文誌の役割

- ▶ 日本の医学研究者・臨床家にとり、MEDLINEと医中誌に求めるものは明らかに異なる。
- ▶ 日本の学会誌の国際化も着実に進行している。
- ▶ 大きな方向性を探りつつ、現実的・实际的な機能を考えたい。「入口としての日本語文献（レビューなど）」の役割⇒参考文献リンク、など。

医学の学術情報の多様性への対応

- ▶ 医学の学術情報の特徴として、利用者・利用目的が多様、ということが挙げられる。
- ▶ 「研究」と「臨床」
- ▶ 多彩な医療従事者
- ▶ 検索の専門家
- ▶ 一般市民
⇒ それぞれのニーズに対応する必要

インターネットの影響

- ▶ インターネットの出現により、人々の情報入手の手段は変化・多様化している。医学情報に関しても例外ではない。
- ▶ 一番端的な表れが電子ジャーナル。国内誌の電子化は出遅れたものの、確実に進行している。
- ▶ オープンアクセスも進行している。
- ▶ 医中誌からのリンクの網羅性が求められる。

医中誌Webの今後の展開

- ▶ 「データベース(コンテンツ)としての医中誌」「中継機能を担うサービスとしての医中誌」
- ▶ 図書館システムとの連携・・・API公開など
- ▶ 論文情報以外の情報へのアクセス。ポータル化
- ▶ リンクセンター的な役割